



++A&T 03 谷口暁彦×SCARTS×札幌の高校生たち「バーチャル避難訓練」以下「バーチャル避難訓練」展覧会風景すべて、撮影：小菅謙三



++A&T 04 CoSTEP×SCARTS×札幌の高校生たち「バイオの大きさ／未来の物語」以下「バイオの大きさ／未来の物語」ワークショップ・展覧会風景すべて、撮影：北川陽絵

# ++A&T—SCARTS ART & TECHNOLOGY Project— (プラプラット)

# —SCARTS ART & TECH- NOLOGY Project—

アートとテクノロジーから生まれる創造の場

++A&T—SCARTS ART & TECHNOLOGY Project—(プラプラット)は、アーティストや研究者、SCARTS、そしてワークショップ等に参加してくれる中学生・高校生らと共に、創作する「場」をつくっていくプロジェクトです。毎回「テクノロジー」に関わるテーマを設定し、コラボレーションを行っています。

参加する中高生は、ワークショップを通して作品制作の一部を担います。彼らは、自分たちが関わり制作したものが、さまざまな行程を経て作品として成立し、発表されるまでを体験する中で、アイデアが形になっていく面白さや、創作活動においてテクノロジーが用いられることの意味や意義、作品が立ち上がる際の背景などを理解していくでしょう。このプロジェクトを通じて彼らのような若い世代が、メディアアートやそれを支えるテクノロジーをより身近に感じ、創造的に用いていくきっかけとなることを目指しています。

2020年度は、「バーチャル空間での表現」と「バイオテクノロジー」のふたつのテーマでプログラムを行いました。



ワークショップの流れを説明する谷口暁彦



一人ひとりの疑問に答える



3Dスキャナーを使って、お互いをスキャンしていく



全体の企画・コーディネーションを手掛けた西翼



ワークショップ参加者と

# ++A&T 03 ++A&T 03 谷口暁彦 × SCARTS × 札幌の中高生たち 「バーチャル避難訓練」 Akihiko Taniguchi × SCARTS × Middle and High school students

谷口暁彦(メディアアーティスト)

小野寺瞭、加来深尋、笠原吉乃、川村柚月、佐藤佑香、佐野和哉、下山七海、白川千愛、snow(松本冬尉)、空橋こゆり、田代奈菜、成田芽生、野口果乃実、平山沙也華、藤田恭平、藤田卓実、三木日香理、水ロー唯葉、森宗優香

「バーチャル空間での表現」をテーマに、メディアアーティストの谷口暁彦を講師に迎え、開催しました。ゲームやインターネットなどで体験することも多くなった仮想現実の世界。谷口の案内のもと、参加者は3Dスキャナーや3Dシミュレーター、ゲームエンジン等を使用し、それぞれの仮想の世界(バーチャル空間)と仮想の自分自身(アバター)をつくり上げました。

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、インターネットを活用した取り組みも広がっています。それは、現実ではできなくなってしまったことを、インターネット空間に避難させるような状況であるとも捉えられます。参加者は、ワークショップや展覧会を通して、仮想の世界や複製するという行為について考え、今現在の社会や自分をとりまく状況を考察しました。



自分の避難したい空間を考え、配置したいものをスケッチする



絵を取り込んで3Dに変換し、バーチャル空間へ配置する



3Dスキャナーを使って、お互いをスキャンしていく



全身をきちんとスキャンできているか確認しながら進める



バーチャル避難所に、自分のアバターを配置する



バーチャル避難所に持っていきたいものをスキャンしていく



完成したバーチャル避難所「カロリーからの避難所」  
バーチャル空間ではいくら食べても0カロリー



完成したバーチャル避難所「ももだちの家」  
いろいろなことを気にせずみんなで集まれる

## 【ワークショップ】

### ワークショップ①「バーチャル避難訓練」

日時 2020年10月31日(土)～11月1日(日) 10:00～17:00  
 会場 SCARTSスタジオ  
 講師 谷口暁彦(メディアアーティスト)  
 対象 中高生

作品制作に関わる中高生を対象にしたワークショップ。参加者はそれぞれのバーチャル空間上の避難場所とアバターを制作しました。

### ワークショップ②「バーチャル避難訓練」

日時 2020年11月14日(土)～15日(日) 10:00～17:00  
 会場 SCARTSスタジオ  
 講師 谷口暁彦(メディアアーティスト)  
 対象 一般

展覧会会期中に開催した、一般参加可能なワークショップ。このワークショップでの制作物も展覧会に反映し、全体をアップデートしました。

参加者は、「バーチャルリアリティ」という言葉や思想と、「避難する」という行為について谷口のレクチャーを受けたあと、「一体何から避難するのか」「どういう場所へ避難したいか」を考え、自分の理想の避難場所をスケッチしました。その後、それぞれがスケッチした画像をソフトを使って3Dデータに起こし、バーチャル空間上に自分だけの避難場所をつくっていきました。避難場所には、3Dスキャナーで取り込んだ自分自身のアバターと、バーチャル世界へ「ひとつだけ持っていけるお気に入りのもの」をスキャンして配置し、参加者それぞれ、個性的な世界をつくり上げました。



来場者も、コントローラーを使ってバーチャル空間の中を歩きまわることができる



夜になると、たくさんの方の映像が現れる



バーチャル避難所に「ひとつだけ持っていけるお気に入りのもの」の複製



モニターに、参加者それぞれのバーチャル避難所とアバターが表示されている

## [展覧会]

### ++A&T 03 谷口暁彦×SCARTS×札幌の中高生たち

#### 「バーチャル避難訓練」

会期 2020年11月3日(火・祝)～12月13日(日) 11:00～19:00  
 会場 SCARTSモールC  
 入場料 無料  
 主催 札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)

ワークショップ参加者が制作したバーチャル空間やアバター、3Dプリンターで複製した「お気に入りのもの」のオブジェ、谷口による映像作品等を配置したインスタレーション。複数台設置されたモニターには、参加者がつくったそれぞれのバーチャル空間とアバターが映し出されています。夜になると、周囲のガラス窓に降りてくるロールカーテンに、たくさんの方が歩いている姿が投影されます。一見、会場には人々が行き交っているようにも見えますが、それらは人間ではなく、実体をもたないアバターです。

自分自身を今いる場所から別の場所へ物理的に移動させ、安全を確保する「避難」に対して、「バーチャル避難訓練」は、自分自身をデジタルデータとして複製し、バーチャル空間へ移動させることを「避難」として捉える試みでした。現実世界にはオリジナルが残りますが、そのとき、オリジナルと複製の線引きはどこにあるのでしょうか。「バーチャル空間での表現」をキーワードに、現在の社会状況や、オリジナルと複製の違い、その可能性や怖さなど、さまざまなトピックを考える展覧会となりました。

#### 谷口暁彦

メディアアーティスト、多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース専任講師。メディア・アート、ネット・アート、ゲーム・アート、パフォーマンス、映像、彫刻作品など、さまざまな形態で作品を発表する。主な展覧会に「イン・ア・ゲームスケープ ヴィデオ・ゲームの風景、リアリティ、物語、自我」(NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、2018～2019年)、個展に「超・いま・ここ」(CALM & PUNK GALLERY、東京、2017年)など。企画展「イン・ア・ゲームスケープ ヴィデオ・ゲームの風景、リアリティ、物語、自我」では共同キュレーションも務める。



左から、久野志乃、奥本素子(モデレーター)、松島肇、内海俊介

# ++A&T 04 CoSTEP×SCARTS×札幌の高校生たち 「バイオの大きさ／未来の物語」

## CoSTEP

## × SCARTS

## × High school students

内海俊介(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 准教授)

松島肇(北海道大学 大学院 農学研究院 講師)

久野志乃(アーティスト)

相沢咲希、神山葵、佐々木葵彩、島田遼太、千葉一輝(特別参加: 楡山勝彦、平松美樹)

北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)と連携し、医療、農業から環境保全まで、さまざまなスケールで私たちが「生きる」と密接に関わるバイオテクノロジーに注目。研究者とアーティストの協働によるワークショップを実施して、そのプロセスや成果を展覧会で紹介しました。



レクチャーに熱心に耳を傾ける高校生たち



副成川公園でのフィールドワーク。研究者のふたりと身近な自然を見つめる



一人ひとりに対して久野が丁寧にコメント



久野のドローイング(部分)



レクチャーの様子



内海による「生態学」についてのレクチャー



資料を見ながら理解を深めていく



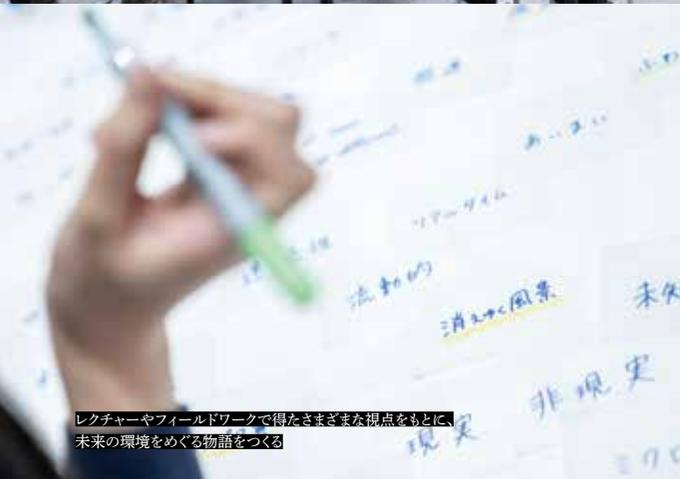
久野によるレクチャー



北海道大学の学生たちの研究を聞いて、研究者の視点を知る



創成川公園でのフィールドワーク



レクチャーやフィールドワークで得たさまざまな視点をもとに、未来の環境をめぐる物語をつくる



自分がどんなことを考えて物語をつくったかプレゼンテーション

## 【ワークショップ】

### 研究者とアーティストによるワークショップ

日時 2021年1月8日(金)～10日(日) 10:00～15:00  
 会場 SCARTSスタジオ  
 講師 内海俊介(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター 准教授)  
 松島肇(北海道大学 大学院 農学研究院 講師)  
 久野志乃(アーティスト)  
 対象 15～20歳

生態学とグリーンインフラストラクチャーを専門とするふたりの研究者と、他者の記憶や視点をモチーフとして絵画制作を行うアーティストを講師に迎え、「私たちのまわりのバイオテクノロジーを知る」「他者の視点を知る、新しい目でまちを歩く」「未来の物語を想像／創造する」というプロセスからなる3日間のワークショップを行いました。

参加者は3人の講師によるレクチャーやフィールドワークを通して、生物同士の関わり合い、自然環境と人間社会の関係、他者の視点をもとにした作品制作の手法などについて学び、身近な世界に対する新たな視点を得ます。それぞれの発見や関心から思考を深め、最終的に自分たちの環境の未来を想像する「物語」を制作しました。



DNAの二重らせんをモチーフにした会場構成



ワークショップのプロセス



内海、松島の研究について紹介



参加者がそれぞれ紡いだ物語を展示



参加者の物語と研究者の話を発想源にした久野のドローイング

〔展覧会〕

++A&T 04 CoSTEP×SCARTS×札幌の高校生たち  
「バイオの大きさ / 未来の物語」

会期 2021年3月12日(金)～4月18日(日) 11:00～19:00  
 会場 SCARTSモールC  
 入場料 無料  
 主催 札幌文化芸術交流センター SCARTS(札幌市芸術文化財団)  
 北海道大学科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)  
 協力 北海道大学大学院農学研究院  
 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター  
 後援 札幌市、札幌市教育委員会

ワークショップの中で参加者が制作した「物語」と共に、彼らの物語や研究者の視点を発想源にした久野志乃のドローイングを展示しました。また、映像作家の北川陽絵によるドキュメント映像やテキストを通して、ワークショップのプロセスや久野の制作の様子、ふたりの研究者の知見についてもあわせて紹介しました。

久野志乃

様似町生まれ。アーティスト。2003年、北海道教育大学大学院修了。札幌を拠点として絵画制作を行う。他者の個人的な記憶に基づく世界像を再構築し、物語性のある油彩画を制作する。記憶の可塑性や多重の視点について思考しながら、ありえないかもしれない風景をつくり出すことを試みている。2020年、個展「森の配置、光の距離で」(ギャラリー門馬、札幌)、2019年、2人展「night bird」(Gallery Camellia、東京)ほか発表多数。

北川陽絵

札幌市生まれ。ビジュアルアーティスト。東京にて映像作家として活動し、短編映画の制作等を行う。作品はアンディ・ウォーホルやガス・ヴァン・サントを輩出した映画祭において選考上映され、国内映画祭にて入賞。主にランドスケープや植物をモチーフに、人が向き合う環境の多層性・多様性を表現する作品を制作する。また、haptics Inc.代表として商業映像、インスタレーションやARコンテンツ等も手掛ける。

CoSTEP (Communication in Science & Technology Education & Research Program; コーステップ)

北海道大学高等教育推進機構オープンエデュケーションセンターに設置されている、科学技術コミュニケーション教育研究部門。科学技術コミュニケーションの教育・研究・実践を、互いに有機的に関連づけつつ、学内外の機関と積極的に連携を進め、科学技術コミュニケーション活動を担う人材養成を行っている。